1-3　関東大震災（関東地震）

1　１９２３年に南関東地方で大地震が発生

1923（大正 12）年 9 月 1 日のちょうど人々がお昼の膳につこうかというその時でした。これまで経験したことがないような激しい揺れが突然関東一円を襲いました。

中央気象台に勤務していた地震係中村左衛門太郎は，「関東大震災調査報告」の中で，突然強い揺れが襲ったその数秒後に戸棚が倒れたこと，揺れが大きいために歩くこともままならなかったこと，机に両手を支えて器物が転落するのを避けたことなど，地震発生直後の様子について詳細に記しています。

この地震の揺れは日本だけではなく世界中を駆け巡りました。しかし振り切れずに最後まで記録できたのは強い揺れでも振り切れないように倍率を低く設定した地震計で，日本では東北，西日本に設置したわずか 6 台の地震計だけでした。このように，関東地震の揺れは大変激しいものでした。

突然の揺れが東京を襲ったのは午前 11 時 58 分 46 秒，震源で断層が動き始めたのはそれより 14 秒前の 11 時 58 分 32 秒とされています。そのときの地震の規模はマグニチュード 7.9，エネルギーに換算すると阪神・淡路大震災をもたらした「1995 年兵庫県南部地震」の約 8 個分に相当します。しかも，その 3 分後にはマグニチュード 7.2，さらにその 2 分後にはマグニチュード 7.1 の余震が起こりました。わずか 5 分の間に，首都圏はマグニチュード 7 クラスの強い揺れに 3 回も襲われたのです。

【どうして大きな災害になったの？】
関東大震災が未曾有の災害となった背景には，昼時で火を使っているときに発生したこと，低気圧の影響で強風が吹き荒れていたこと，当時の建物が耐震性や耐火性に乏しかったことなど複合的な要因があげられます。

関東地震の震源域と余震

「関東地震の震源域と相模湾周辺の海底地形」（宍倉，2008），「関東大震災大東京圏の揺れを知る」（武村，2003）をもとに作図

防災誌「関東大震災」より引用

現在，推定されている関東地震の震央とその余震の震央，規模を示しています。本震は丹沢付近から破壊が始まり，震源域は房総半島南部に及んだとされています。マグニチュード 7 以上の余震は，本震発生からわずか 5 分間に 2 回，2 日間で計 5 回発生しました。

【液状化による館山市北条海岸の地割れ】液状化によって道路に地割れが発生し，多量の水や砂，泥を噴出しました。「土木工事震害調査報告書」（物部、1926）より引用

防災誌「関東大震災」より引用

2　被害の状況

関東地震による災害は，その被害が甚大なことから「関東大震災」と呼ばれています。

関東地震による死者数は，全体で 10 万人を超え，その 9 割が火災による焼死でした。東京都での火災による被害が大きかったことから一般に東京都で発生した地震といわれることがあります。

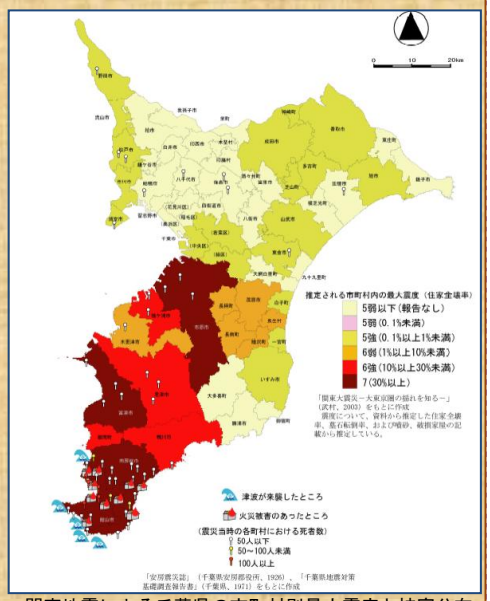
しかし，震源域は神奈川県から千葉県の房総半島にかけての地域であり，地震による土砂崩れや家屋の倒潰などの被害は東京都よりも千葉県および神奈川県のほうが大きかったのです。

【元禄地震の教訓が生かされた！】
安房震災誌によると，住民は，関東地震の際，揺れと同時ににわかに海水が引いたのをみてすぐ高台に逃げたということです。安房地域は元禄地震（1703 年）の際にも大きな津波被害を受けており，そのときの教訓が代々語り継がれて残っていました。

【千葉県の被害状況】

千葉県では，房総半島南部の館山市北条，那古地区，南房総市，市原市の養老川沿い，木更津市，富津市のほか，東葛地域の江戸川沿いの低地でも建物の倒潰など被害が集中しました。

千葉県での被害の内訳をみると，建物の全半潰により 2 万棟近い家屋が被災し，死者は 1200 人を超えました。



関東地震による千葉県の市町村別最大震度と被害分布

防災誌「「関東大震災」より引用

さらに津波などによる流失，土砂崩れなどによる埋没，また交通･通信機能も破壊され，被災地は生活の機能がほとんど失われてしまいました。そして被災者は正しい情報を入手できない状況の中，流言（デマ）が飛び交いパニック状態にあったといわれています。